

地域コミュニティの集団的意思決定 のための討議円滑化策に関する一考察

河原 健太郎¹・藤澤 徹²・鈴木 亮平³・秀島 栄三⁴

¹学生会員 名古屋工業大学大学院工学研究科 (〒466-8555 愛知県名古屋市昭和区御器所町)
E-mail:cjk19512@stn.nitech.ac.jp

²正会員 アルカダッシュ株式会社 (〒454-0003 愛知県名古屋市中川区松重町4-41)
E-mail:fujisawa@arkadas.co.jp

³非会員 西日本電信電話株式会社 (〒540-8511大阪府大阪市中央区馬場町3番15号)
E-mail:ryouhei@keik1.ace.nitech.ac.jp

⁴正会員 名古屋工業大学大学院工学研究科 (〒466-8555 愛知県名古屋市昭和区御器所町)
E-mail:hideshima.eizo@nitech.ac.jp

地域コミュニティでは将来に向けて解決すべき様々な課題に対して集団的に意思決定を行うために当事者らは討議を行う。このような場を想定した実験的な討議の場を設け、複数主体によって続けられる発言のプロセスの可視化を試みた。具体的には会話分析のコーディングにもとづき発言を類型化するとともに時間軸上に各発言を配置する。この結果により、誰かによる発言内容の誘導や、他者への同調傾向、知識の共有化などを確認することができる。本研究ではこうした討議実験の結果から、情報の付加による展開、迷走する討議への対応、討議の収束チェック機能、沈黙を利用した展開などがこの種の討議を円滑化させる方針として有効であることを知見として導き出した。

Key Words : *debate, collective decision making, facilitation*

1. はじめに

公共プロジェクトの実施に向けて行政や住民など関係主体が意見を交わし合い、プロジェクトに係る意思決定が進む。今日ではプロジェクトの計画段階から住民が参加するなど、関係主体がコミュニケーションを行う場が増えている。本研究ではこのような公共プロジェクト実施に向けた関係主体間のコミュニケーションの場を公的討議と呼ぶ。しかし、公的討議における議論を観察すると、数回の議論を通じて関係主体間で理解し合えず、結論に至らないことも多い。複数の関係主体間で意見を交わし、合意に至ることは難しい。質の高い公共サービスを住民に提供するためにも公的討議で合理的な議論が行われる必要がある。

本研究では、討議が結論に至るまでのプロセスに焦点をあてた討議実験を行う。参加者間の発言を会話分析のコーディングにもとづき類型化するとともに、参加者間の発言のやり取りを時間軸上に配置し可視化することで議論の展開を理解する。そして討議の円滑化を図るため

に対処すべきことについて考察する。また、設定条件が異なる討議を比較することで参加者が発言しやすいうちにファシリテータがすべき配慮などについて考察する。

2. 公的討議のプロセス合理化に向けて

(1) 合理的ではない議論

公的討議では多くの場合何人もの人で議論を行い、限られた時間内で一つの結論を導かなければならない。結論を導くために参加者によって論点が幾つも提示され、提示された論点について議論が行われる。その過程の中で参加者間で考えや知識を共有していき、議題に対する一つの結論が導かれる。しかし、公的討議が結論に至るまでのプロセスを観察すると、そのプロセスは参加者間の相互関係や参加する主体の特徴によって様々な展開を見せ、討議によっては合理的ではない議論が行われる場合がある。

例えば、討議中に議題とは関連性のない議論が行われる場合がある。ある参加者が議題とは関連性のない論点

を提示し、それをきっかけに議論が議題から離れてしまう。そのような議論が原因で時間内に結論に至らない場合がある。また、ある参加者が結論を導く上で重要な論点を提示したものの、その論点について議論をしている最中に論点が変わってしまう場合がある。話し合われていた重要な論点は再び提示されなければ解決すべき論点が残されたまま結論に至ってしまう。このような展開を辿った討議から導かれた結論は合理的であるとは言いがたい。ある参加者が提示した重要な論点に対して参加者間で考えが対立関係にあり、一向に考えが共有されず平行線を辿る場合もある。話し合われている論点についての議論が行き詰まり沈黙してしまう場合もある。

以上、公的討議プロセスの展開形態は様々で、その中には合理的ではない議論が行われる展開もある。

(2) ファシリテータによるプロセスの合理化

公的討議プロセスの合理性を保つためにプロセスの進め方の改良が必要である。討議プロセスの合理性を保つための方法の一つとしてファシリテータの参加が挙げられる。ファシリテータとは、討議参加者の参加を促進し、プロセスを調整する役を言う²⁾。ファシリテータは中立的な立場で参加者の意見を聞き、かつ参加者間の意見の合意に向けて深い議論が行われるように討議プロセスを調整していく。ファシリテータが討議に参加することで合理的な議論が行われることが期待される。

ただしファシリテータのスキルは経験的に得られる面が強く、公的討議に有能なファシリテータが常に参加するとは限らない。討議プロセスの進め方の改良を個人に求めることには限界がある。

(3) 討議プロセスの標準化の意義

前節で述べたように、討議にファシリテータが参加することは討議プロセスの合理性を保つ上で重要ではあるが、プロセスの進め方の改良を個人に求めることには限界がある。そこでガイドラインといった形で討議プロセスの進め方を標準化したものを知見として広めていくことも考えられる。

ガイドラインを通じて討議が合理的に進むための知見をファシリテータに提示することで、ファシリテータは合理的ではない展開になった際に適当な判断をすることができるだろう。また、そのような知見を討議参加者に事前に提示することも有益である。参加者はあらかじめ合理的ではない議論の展開形態を理解することができ、議論の展開に注意して発言をするようになる。参加者の協調的な行動を促し、議論を円滑に進めることができるだろう。

以上、討議プロセスの進め方を標準化したものを知見

としてファシリテータや参加者に提示することで、議論を合理的に進めることができ、討議の質が向上することが期待される。

(4) 会話時系列のグラフ化による討議プロセスの評価

討議プロセスの標準化に向けて、合理的ではない議論の展開形態を理解し、その対処の仕方などといった知見を得る必要がある。しかし討議は参加者間で交わされる発言により構成されているため、その発言一つ一つが議論の展開にどのような影響を与えているのか判断が難しい。討議プロセスを評価する手法を確立する必要がある。人々のコミュニケーションプロセスを分析する方法としてプロトコル分析³⁾がある。プロトコル分析は単語あるいはもう少し長い句や文節を定量的に捉えることで会話を解析する方法である。ただし短く発言した「ああ」といった単語が深い意味を持つ場合や、相づち程度でしかない場合などその解釈に熟慮が必要な場面がある。羽鳥ら⁴⁾は公的討議を題材にしてプロトコル分析を行い、討議参加者間の認識の不一致や対立を明瞭化する方法論を提示している。ただし定量的な結果を導いている一方で、その理論的制約から討議内容を二者択一なものに絞り込んでいる。

本研究では、実験的討議を行い、会話時系列のグラフ化を試みる。グラフ化により討議プロセスをできる限り客観的に捉えることを目指す。具体的には、実施した討議における参加者の発言一つ一つを発言の機能的側面から分類し、時間軸上に並べることで討議が結論に至るまでのプロセスを視覚化する。発言の分類は会話分析に基づいて行う。会話分析とはプロトコル分析と同様、コミュニケーションプロセスを分析する方法論の一つであり、実際のコミュニケーションの場を観察して、主体間で行われる会話の展開則などを解釈するための手法⁵⁾である。会話分析は、プロトコル分析のように単語や文節単位で発言の意味を解釈するのではなく、発言前後における内容変化の有無や会話の流れに着目するため、比較的容易に発言を分類できる。会話分析は日常会話から教育や医療など専門分野における会話まで幅広い範囲を対象として行われている。本研究は会話分析の方法に則った応用研究の一つとなるだろう。

(5) 設定条件が討議プロセスに与える影響

討議プロセスは参加者間の相互関係や参加する主体の特徴によって様々な展開を見せる。この他に討議の設定条件がプロセスに影響を与える。公的討議を行う上で、討議を主催する側により討議参加者の構成や討議時間、参加者人数など様々な設定がされる。例えば、討議参加人数が多くなることにより、参加意識の低下、緊張の高

まりなどが生じ、発言機会が少なくなる場合がある。発言機会が少なくなることで参加者間での考えや知識の共有がうまく為されないことが考えられる。このように討議の設定条件は参加者の発言行為に影響を与え、討議プロセスが合理的ではない展開となる要因となりうる。

そこで本研究では、設定条件を変えた実験的討議を行い、討議プロセスを比較する。

3. 実験的討議と会話時系列のグラフ化

(1) 実験的討議の概要

会話時系列のグラフ化を試みるために、2008年12月に実験的討議を実施した。

討議参加者には商店街の店主になったと想定してもらい、商店街の整備に関して討議してもらった。分析者は、想定する商店街の現状など討議を行う上で必要な情報を参加者にあらかじめ提供した上で順に議題を投げかけていく。議題提示後、参加者間で自由に討議をしてもらおう。事前に制限時間は設けず、グループとして結論が出たら終了とする。途中で質問があれば討議の前提となる情報のみ分析者が提供する。

上述の討議を以下の条件で実施する。

- ・対面討議(1)：初対面同士の参加者が対面して行う
- ・対面討議(2)：顔見知り同士の参加者が対面して行う
- ・非対面討議：初対面同士の参加者がテレビ電話を用いて行う

各討議とも4人一組とし、重複しないように計12人の学生に参加してもらった。各討議の参加者をそれぞれA～Dと名付ける。対面討議(1)、非対面討議では、それぞれ参加者が互いに初対面同士になるように、対面討議(2)では顔見知り同士になるように人選を行った。また、非対面討議にはテレビ電話の使用経験がない人を選んだ。図-1に実験的討議の会場を示す。対面討議(1)、(2)では、参加者は一つの部屋に集まり討議を行う。非対面討議では参加者は二つの部屋に分かれ、テレビ電話を介したパソコンのモニター越しで意見のやり取りを行う。

会話時系列のグラフ化は、参加者の発言を文字情報に置き換えたデータをもとに行うため、ICレコーダーで討議中の発言を記録する。討議中の参加者の様子を撮影するため図-1に示すようにビデオカメラを設置する。以下に議題と非対面式の討議の実施方法について詳細を示す。

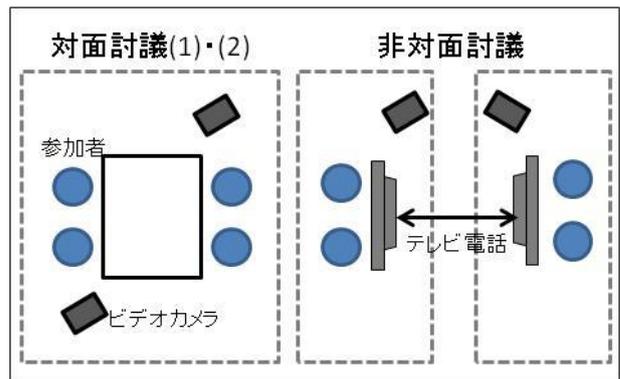


図-1 各討議の会場図

a) 議題について

表-1に示すように、討議は全5幕によって構成されている。各幕では議題が一つずつ用意されている。第1幕では、図-2に示す「A：ファサードも含めてバザール的なデザイン」、「B：歩道幅を広く秩序に沿ったデザイン」の2つの商店街のイラストを参加者に提示し、事前の説明を踏まえた上で想定する商店街が整備後にどちらのイメージになってほしいかを議論し、結論としてグループでイラストを1つ選んでもらう。第2幕では、第1幕で選んだ商店街のイラストの中で改良すべき点を挙げてもらう。第3幕では、想定する商店街が整備後に第1・2幕で話し合われた商店街のようになったとして、期待される効果について議論してもらう。第4幕では、店主としてその商店街で商売する際に生じる問題について議論してもらう。第5幕では、想定する商店街が第1・2幕で話し合われた商店街を目指すべく、老朽化が進むアーケードの改修工事を行うという状況を想定してもらい、その際の商店街と行政の費用負担比率をグループで提示してもらう。

表-1 各幕における議題

第1幕	商店街整備後のイメージはどちらか(二つのイラストを提示)
第2幕	第1幕で選んだイラストの中で改良したい点を挙げよ
第3幕	第1・2幕で決まった商店街のように整備されたことで期待する効果を挙げよ
第4幕	整備後の商店街で商売する上での問題点を挙げよ
第5幕	アーケード改修工事を行う際の行政と商店街の費用負担比率を提示せよ



図-2 第1幕で提示した商店街のイラスト

b) 非対面式の討議の実施方法について

テレビ電話にはインターネット電話サービスのSkypeを使用する。Skypeは三つ以上のモニターを用いてテレビ電話を行うことが不可能であったため、図-1に示すように参加者は二つの部屋に分かれ、2人で一つのモニターを使うようにした。

2) 結論の幅が異なる討議プロセスの比較

用意した議題ごとに結論の出方が異なる。議論の結果として導かれる結論の幅によって討議プロセスにどのような違いが生じるかを観察する。

例えば、第1幕では商店街のイラストA・Bのどちらかを選ぶことが結論となる。また第5幕ではアーケード改修工事における商店街と行政の費用負担比率の決定が結論となる。このような議題では、議論から導かれる結論が限られている。一方、第2, 3, 4幕では、出た意見を参加者間で整理したものが結論となるため、導かれる結論には幅がある。結論の幅が限定的となる議題のほうが議論が収斂していきやすいと考えられる。

(3) 設定条件が異なる討議プロセスの比較

討議の設定条件がプロセスに与える影響を観察するため、対面討議(1)、対面討議(2)、非対面討議の設定条件が異なる討議を実施し、討議プロセスを比較する。

図-3に示すように、各討議を二つずつで比較する。対面討議(1)と対面討議(2)、対面討議(1)と非対面討議の2種類の比較を行う。以下にそれぞれの比較の意図を述べる。

a) 初対面同士である討議プロセスと顔見知り同士である討議プロセスの比較

「参加者が初対面同士で討議を行う」ことが討議プロセスに与える影響を観察する。公的討議は行政などといった事業者や学識者、住民代表など所属する組織が異なる参加者により行われるため、参加者が初対面同士であるケースが多い。その場合、自分以外の参加者の発言の傾向や考え、知識など参加者の特徴が分からないため、討議開始直後、参加者は自分がどのような役割で討議に参加すべきか戸惑うかもしれない。例えば、顔見知り同士の討議の場合は誰がファシリテータを担うことが適当であるかがこれまでの経験より判断できる。しかし、初

対面同士の討議の場合、参加者の特徴を事前に知らないため適切なファシリテータを決めることができないかもしれない。ファシリテータが自然には決まらないことも考えられる。ファシリテータが自然に発生したとしても各参加者の特徴を把握しないまま討議を進めなければならない。また、初対面であることが参加者に緊張感を与え、発言を消極的にさせることも考えられる。

以上のように「参加者が初対面同士で討議を行う」ことが討議プロセスに影響を与えると考え、その影響を明らかにする。

b) 対面式の討議プロセスと非対面式の討議プロセスの比較

テレビ会議といった非対面式の討議を行うことで、対面式の討議では見られない参加者間の意見のやり取りを観察する。公的討議は参加者が一堂に会して行うのが一般的である。一方で近年では民間企業などで離れた場所にいる社員間でテレビ会議が行われるなど、主体が同じ空間に居ない状態で討議が行われることもある。しかし、テレビ会議といった非対面式の討議を初めて経験する参加者は、討議を進めていく上で何らかの困難を感じると考えられる。例えば、意見を述べる際にモニター越しにいる相手に聞こえているのかを不安に思い、聞こえているか確認の発言をするかもしれない。または意見を述べたがモニター越しの相手の反応が読み取れずに相手に発言を求めるかもしれない。非対面式という慣れない討議形式から議論が活発に行われないことも考えられる。

以上より、テレビ会議などの非対面式の討議では、慣れていないが故に対面式の討議では見られない意見のやり取りが行われることを期待する。そのような意見のやり取りは慣れている対面式の討議では不要なやり取りであると言える。そこで、対面式の討議と非対面式の討議を比較することで対面式の討議を進める上でどのようなやり取りが暗に前提となっているのかを明らかにし、ファシリテータが参加者にすべき配慮などについて考える。

(4) グラフ記述の概要

計3回の実験的討議を実施し、各討議を対象に会話の時系列のグラフ化を試みる。

グラフは録画した画像データと参加者の発言を文字情

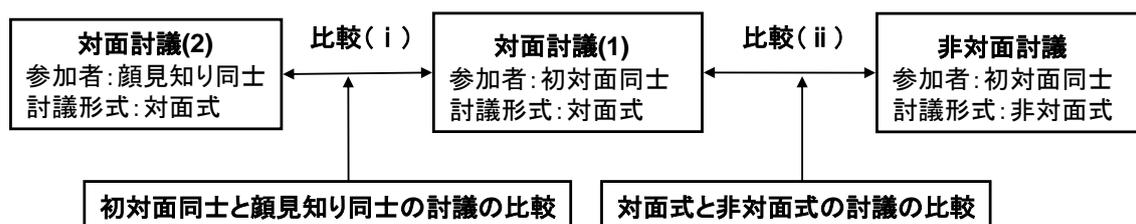


図-3 実験的討議の概略

報に置き換えたデータをもとに作成する。参加者の発言を文字情報に置き換える際には、各発言が発生した時間や所要時間も記述する。図-4は対面討議(1)の会話を時系列でグラフ化したものの一部である。時間を横軸にとり、縦軸には各参加者を並べ、一つ一つの発言の所要時間を青いセルにより表す。青いセル一つは2秒間に相当し、青いセルが連なるほど時間を要する長い発言をしていることとなる。青いセルがない部分は沈黙状態を意味する。また、グラフ下方にある円内の数字は発言を機能的側面から分類したコード番号になる。機能的側面からの発言の分類については次節にて詳しく説明する。討議は議題に対する結論に至るまでに、幾度も参加者によって論点が提示される。それぞれの論点のもとで議論されたテーマやキーワードを「サブテーマ」とし、その内容をグラフの下方に示す。それぞれのサブテーマは結論を導く上で必要であるか、各サブテーマについての議論は適切であるかどうかなど、合理的ではない展開がどこで生じたかをこれを用いて評価することができる。

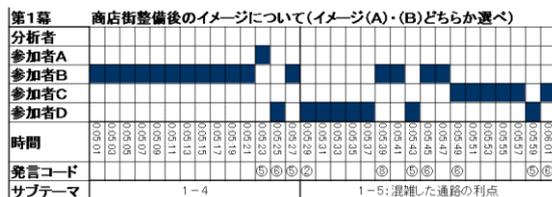


図-4 会話時系列のグラフの一部

(5) 機能的側面からの発言の分類

討議中の発言の中には議論の流れを変え、時には収斂されていく機能を持つものもある。参加者は発言行為によって、他者に情報を伝達するだけでなく、議論の流れをコントロールしようとしている。個々の発言が議論の展開にどのような影響を与えるのかを観察するため、一つ一つの発言をこのような機能的側面に着目して分類を行う。発言の分類は表-2に示す会話分析のコーディング⁹⁾に基づいて行う。

このコーディングの分類基準は会話の流れと内容の変化という二つの要素の組み合わせにより構成されている。会話の流れについては、会話を抽象化—具体の階層の中を推移していくものとして捉える。それにより、展開に何も影響しない「停滞」、話し合われている内容について情報や解釈を加える「平行移動」、例示や詳細な説明を行う「深化」、それまでの内容の整理や要約を行う「浮上」の4通りの働きを見出すことができる。内容の変化については、それまでの流れが打ち切れ、新たな内容の話が始められたか否かによって二分することができる。ただし内容が変化したかどうかはそれまでの内容との類似性から判断するため、本来は明確に分類できるものではない。以上、発言を機能的側面から計8つのコ

ードにより分類することができる。

(6) グラフ化による討議プロセス表現の正確さ

本実験で実施した討議を対象にグラフを作成した。作成したグラフは、発言を意味する青いセルを時間軸上に並べる際にはICレコーダーで記録した参加者の発言を文字情報に置き換えたデータをもとに行い、各参加者の発言箇所や各発言の所要時間、沈黙時間などを時間の経過に沿って正確に視覚化し、先述のように会話分析のコーディング表にもとづいて一つ一つの発言を機能的側面から分類している。北村⁷⁾は、議論を観察し、発言を時間軸上に並べ、参加者間で知識の共有が行われるプロセスの視覚化を試みている。その際に発言間に関係性のあるものを矢印でつないでいる。この発言間に関係性の記述は作成者の主観により行われていた。本研究ではグラフ作成者の主観を排除するため、録画した画像データや参加者の発言を文字情報に置き換えたデータから判断できない点はグラフ上に記述せず、より客観的に討議プロセスを捉えたグラフになるように作成した。

次章では、このグラフをもとに討議プロセスを分析し、各討議がどこで合理的ではない展開になったのかを評価し、その展開形態を理解する。そしてファシリテータが対処すべきことについて考察していく。

表-2 会話分析のコーディング

内容変化があるもの	
① 無関係内容変化	これまでと関係の無い内容に関する発言
② 情報追加的内容変化	新情報を加えた内容に変える発言
③ 具体化・詳細的変更	具体的、詳細な内容に変える発言
④ 抽象化・要約的変更	抽象的、要約的内容に変える発言
内容変化がないもの	
⑤ 無展開	会話の展開に何も貢献しない発言
⑥ 情報追加	新情報、解釈、考えを付加する発言
⑦ 具体化・詳細化	具体化や詳しい説明を加える発言
⑧ 抽象化・要約	抽象化や今までの話を要約する発言

4. 合理的ではない議論の展開形態に関する考察

(1) サブテーマの議論に着目したプロセスの評価

3章で作成した討議プロセスのグラフにおいて、議題に対する結論に至るまでに現われたテーマやキーワードを「サブテーマ」とし、サブテーマごとに討議プロセスを区切ることにする。

サブテーマ内の議論に着目すると、参加者間で発言が十分交わされる前に、ある参加者の発言をきっかけに違うサブテーマについて議論が始まる場合がある。一方、参加者間で十分に発言が交わされたが、考えが共有されず平行線を辿る議論になる場合もある。また、特定の参加者のみで話し合われるサブテーマもある。そこで各サ

ブテーマの議論を構成する発言を機能別、参加者別に集計し、議論の合理的ではない展開形態とその対処について考察する。発言の機能別による集計は、会話分析のコーディングにより発言を分類した8つのコードに従う。

実施した対面討議(1)、対面討議(2)、非対面討議について各サブテーマの議論を構成する発言を機能別に集計したものを図5～図7に示す。参加者別に集計したものを図8～図10に示す。

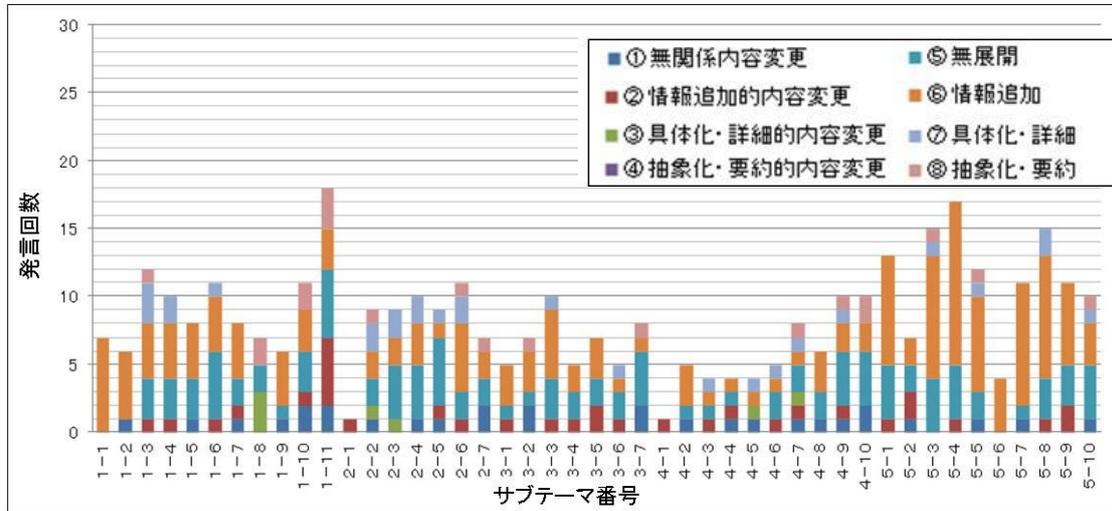


図-5 対面討議(1)におけるサブテーマ別発言回数 (機能別表示)

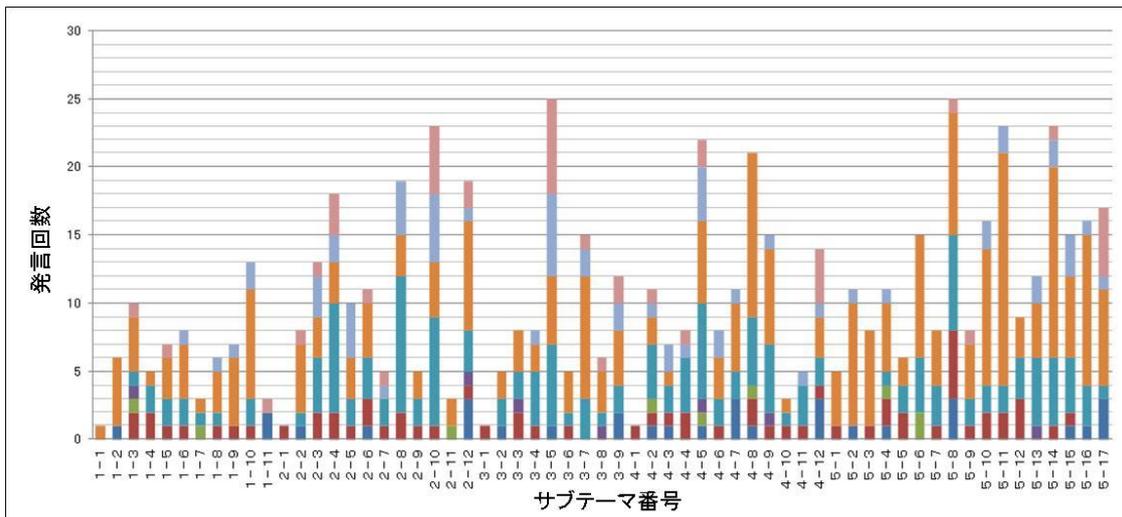


図-6 対面討議(2)におけるサブテーマ別発言回数 (機能別表示)

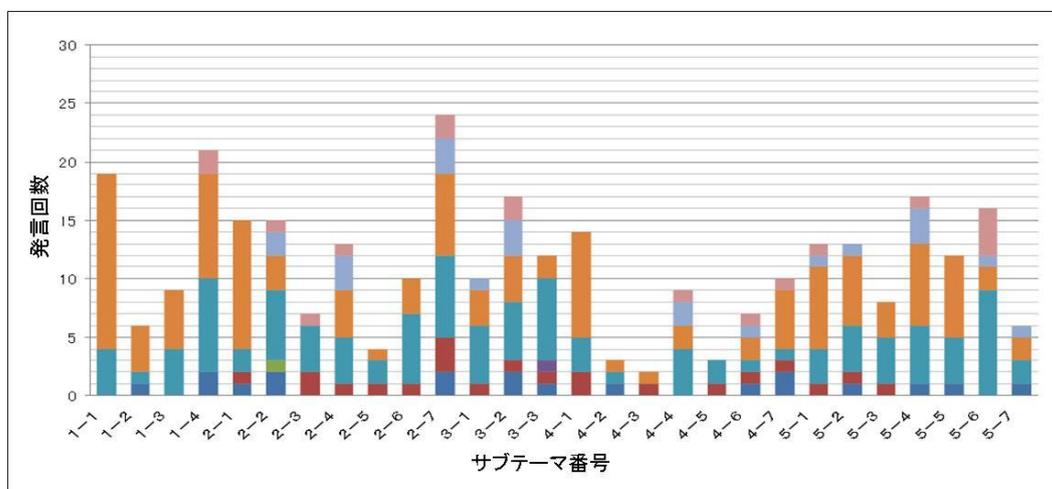


図-7 非対面討議におけるサブテーマ別発言回数 (機能別表示)

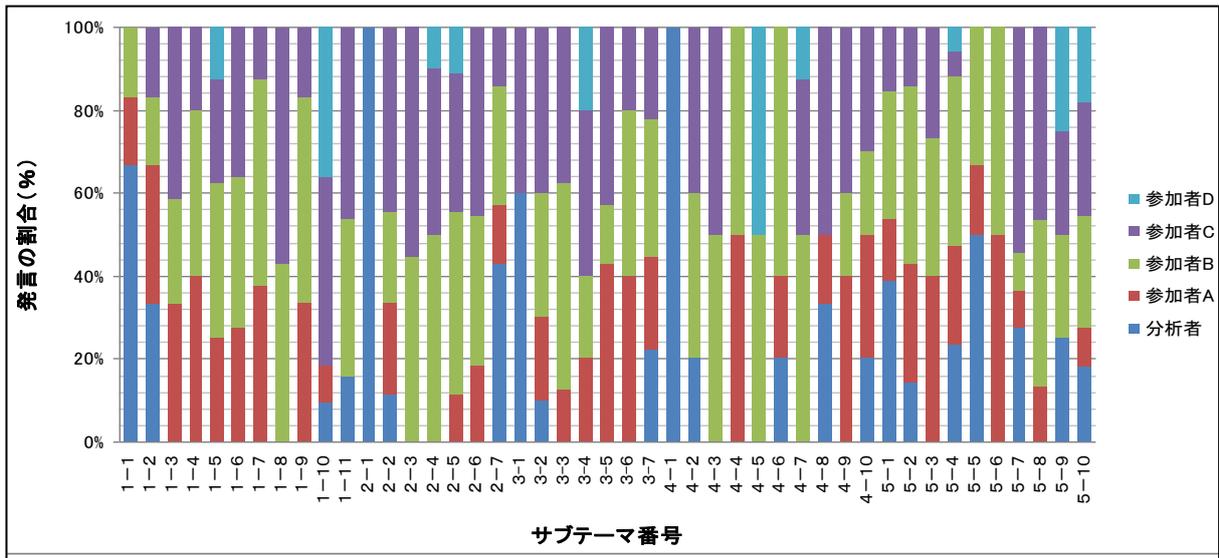


図-8 対面討議(1)におけるサブテーマ別発言回数 (参加者別表示)

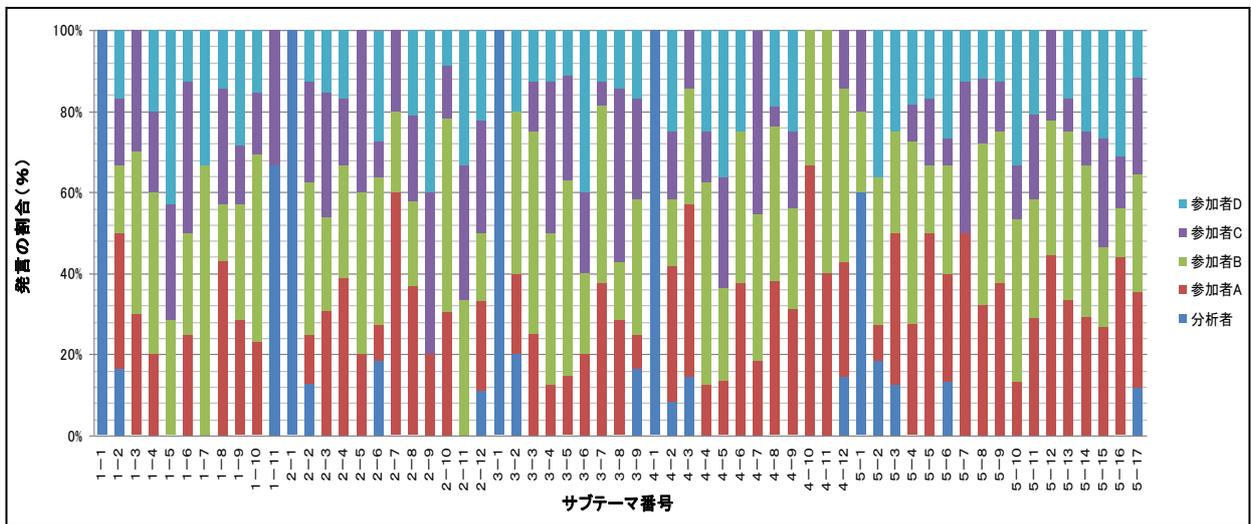


図-9 対面討議(2)におけるサブテーマ別発言回数 (参加者別表示)

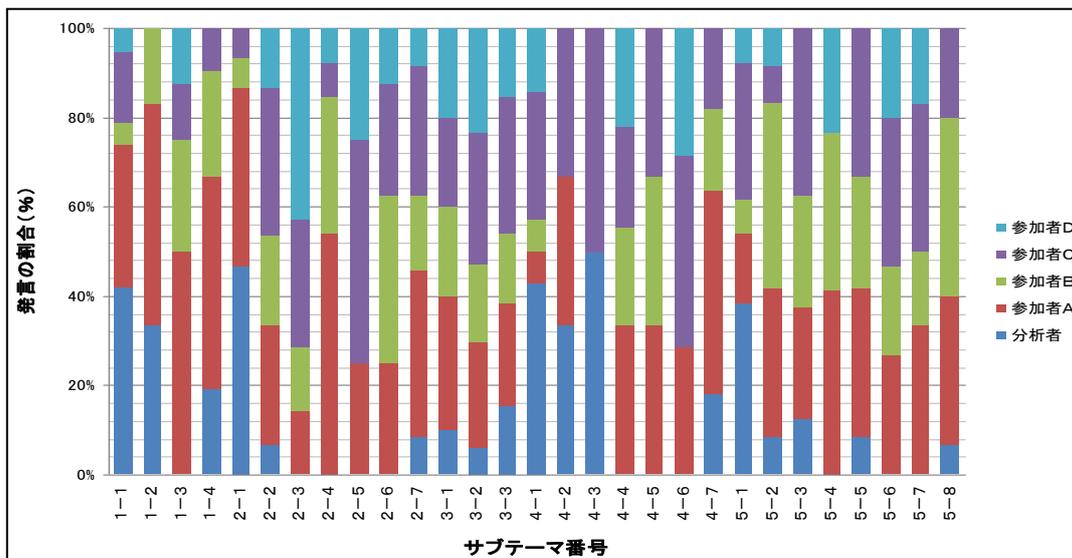


図-10 非対面討議におけるサブテーマ別発言回数 (参加者別表示)

a) サブテーマが次々入れ替わる展開

対面討議(1)の第4幕「整備後の商店街で商売する上で生じる問題点を挙げよ」で行われた議論に着目する。図-5より、サブテーマ4-2から4-6についての議論は「6：情報追加」の発言が他のサブテーマよりも少なく、発言回数が少ないことが分かる。また、図-8より、サブテーマ4-2についての議論は参加者Bと参加者Cにより行われているように、サブテーマ4-2から4-6についての議論は分析者を除いた二者によって行われている。サブテーマについて各参加者は自分の考えや知識を付加して共通の考えや知識を増やしていく。しかし、サブテーマ4-2から4-6についての議論は参加者が情報を付加する前にサブテーマが次々に入れ替わる展開になっている。このような展開になる原因としては、参加者間で最終結論を導く上で重要視するサブテーマが異なることが考えられる。各参加者がそれぞれ重要とするサブテーマについて議論を行う展開にしようとするため、サブテーマが頻繁に入れ替わり、各サブテーマとも情報の付加が十分に行われない。情報の付加が十分に行われていないサブテーマが最終の結論に反映された場合、そのような結論は合理的であるとは言いがたい。従って、ファシリテータはサブテーマが頻繁に入れ替わる展開にならないように、話し合われているサブテーマについて参加者に発言を求め、参加者間で考えや知識を付加し合う展開にするべきである。

b) サブテーマについての考えが共有されない展開

対面討議(2)の第5幕「アーケード改修工事を行う際の行政と商店街の費用負担比率を提示せよ」で行われた議論に着目する。図-6より、サブテーマ5-11「一店舗が負担できる費用の検討」についての議論は、発言回数が多く、「6：情報追加」の発言が他のサブテーマに比べて多い傾向にあることが分かる。「6：情報追加」の発言は参加者間で考えや知識を共有する上で重要である。ただし、サブテーマ5-11と5-14は同一のテーマであり、サブテーマ5-11についての議論が後で再び行われていることから、各参加者が積極的に自分の考えや知識を付加したサブテーマでも参加者間で考えが共有されない場合があると言える。各参加者が積極的に情報を追加したサブテーマについて参加者間で考えが共有されない原因の一つとして、そのサブテーマについて出た意見を参加者間で確認し合う展開にならなかったことが考えられる。図-6に示すように、対面討議(2)におけるサブテーマ2-10や3-5についての議論は、サブテーマ5-11についての議論と同様発言回数が多い。しかし「7：具体化・詳細化」や「8：要約・抽象化」の発言が多い。ある参加者の情報追加の発言に対して、他の参加者が要約した発言や、喩えの表現を使った発言で返すといったやり取りが行われ

ており、参加者間で考えを確認し合う展開になっていたと言える。以上より、一つのサブテーマについて参加者が積極的に情報を追加する展開を辿った場合、ファシリテータはこれまでに出了意見を要約し、そのサブテーマに対する考えを参加者間で共有する機会を設けるべきである。

また、サブテーマに対する考えが参加者間で対立し、そのサブテーマについて各参加者が積極的に情報を付加しても考えが共有されず、議論が平行線を辿っている場合が考えられる。その際、ファシリテータは新たなサブテーマについて議論を行う展開にすることが一つの方法として考えられる。

c) 関連性のないサブテーマの議論が行われる展開

作成したグラフより、議論したサブテーマが最終結論を導く上で必要なテーマであったかどうかを評価し、議題に関連性のないサブテーマが議論される要因について考察する。図-11は対面討議(1)の第4幕「整備後の商店街で商売を行う際に生じる問題を挙げよ」における討議のグラフの一部である。サブテーマ4-5、4-7についての議論は「1：無関係」の発言により始まっている。サブテーマ4-5「商店街に客を呼び込むための方法」についての議論は、参加者Dの発言をきっかけに始まり、参加者Bの二者により行われている。本来第4幕では、整備された商店街で商売を行う上で問題について議論すべきであるが、サブテーマ4-5についての議論では想定する商店街の改善策を検討していることから、議論が議題から離れていることがうかがえる。サブテーマ4-7についての議論も同様に、参加者Bの「1：無関係」の発言をきっかけに、参加者C、参加者Dの三者により議題とは関連性のない議論が行われている。討議中、議題とは関連性のない発言をする参加者がいる。そしてその発言に対して他の参加者が「6：情報追加」などの発言をすることで、議論が議題から離れていく。議論が議題から離れないようにするためには、討議中に関連性のない発言をなくすことが必要である。しかし、実際そのような発言をなくすことは難しい。関連性のない発言をできる限り減らすための対処として、参加者に議題を常に頭において討議に参加してもらうことが重要である。具体的には、討議中にファシリテータが議題を確認する機会を設けるべきである。それにより、参加者は議題を念頭に置きながら発言するようになり、議題とは関連性のない発言が減るだろう。また、ある参加者が関連性のない発言をした際に、他の参加者がつられて発言をしないようにすることも重要である。その意味でも議題を確認する機会を設けることは重要である。

セスに影響を与える。そして、結論が限られている議論と結論に幅がある議論では合理的ではなくなる展開の傾向が異なっている。

5. ファシリテータ参加の重要性と参加者にすべき配慮

(1) 初対面討議におけるファシリテータ参加の重要性

顔見知り同士で行う討議では、誰がファシリテータを担うことが適当であるかがこれまでの経験より判断できる。一方、公的討議のように初対面同士で行う討議では、参加者の特徴が分からず、判断が難しい。ファシリテータが自然には決まらないことも考えられる。そこで、対面討議(1)と対面討議(2)において、ファシリテータの役割が自然に発生したかどうかを発言の機能的側面から評価する。

各参加者の発言を会話分析のコーディングをもとに機能別に集計した結果を図-12、図-13に示す。図-12は対面討議(1)の参加者について、図-13は対面討議(2)の参加者についてである。図-13より、対面討議(2)の参加者Cは「8：要約・抽象化」の発言が占める割合が他の参加者に比べて高いことが分かる。一方「6：情報追加」の発言回数が51回と他の参加者に比べて少ない。同討議の参加者Cは他の参加者に比べて議題に対して自分の考えや知識を付加することよりも、これまでに出了意見を整理する役割を担っていたと言える。また参加者Bが議題とは関係がない発言をした際にも、その発言に対して「話を戻そう」といった発言をし、議題から離れた議論を引き戻していた。このことから参加者Cはファシリテータを担っていたと言える。

一方、対面討議(1)では「8：要約・抽象化」の発言の割合が特別高い参加者がいないことが図-12より分かる。対面討議(2)のように意見を整理する役が発生しなかったことがうかがえる。このように、ファシリテータの役割を担う参加者が発生しない場合がある。対面討議(1)におけるサブテーマ1-2「討議の進め方」についての議論では、意見をまとめる役を決める展開になり、参加者Bが担うことになった。しかし参加者Bの発言は「6：情報追加」の発言回数が60回と他の参加者よりも多く、意見を整理することよりも自分の考えや知識を付加することに重きを置いていた。参加者間で意見を整理する役を決めたが、実際はそのような役が発生していないことが分かる。

以上、参加者が初対面同士で行う討議でファシリテータが自然には発生しない場合がある。もちろんファシリテータスキルを持った人が参加して、ファシリテータとして討議を進めていく場合もあるだろう。ただし、その

ような人がいつでも参加するとは限らない。初対面同士で討議を行う場合、ファシリテータは参加者の中から決めるのではなく、事前に決定しておくことが重要である。また、対面討議(1)において討議開始直後に参加者間で意見を整理する役を決める展開が見られたように、初対面同士である討議では議題について議論する以前にやり取りが増えることが考えられる。意見を整理する役を決める展開になるのは、参加者が初対面同士であり、意見を整理する役を誰にすべきかがこれまでの経験から判断できないためである。ファシリテータがあらかじめ決まっていることでそのようなやり取りをなくすことができ、早く議題について議論を始めることができる。その意味でも、初対面同士で行う討議においてファシリテータを事前に決定しておくことが重要である。

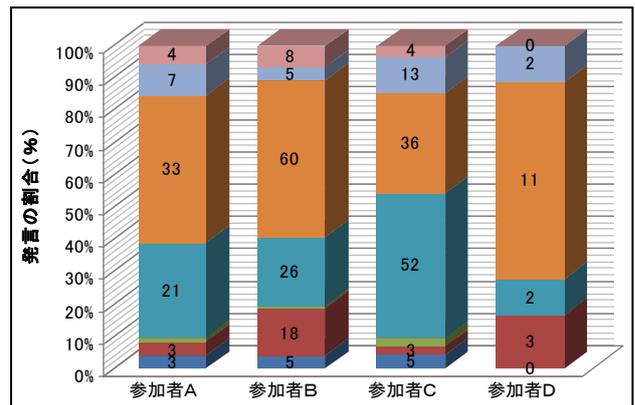


図-12 対面討議(1)参加者別の発言の構成 (機能別表示)

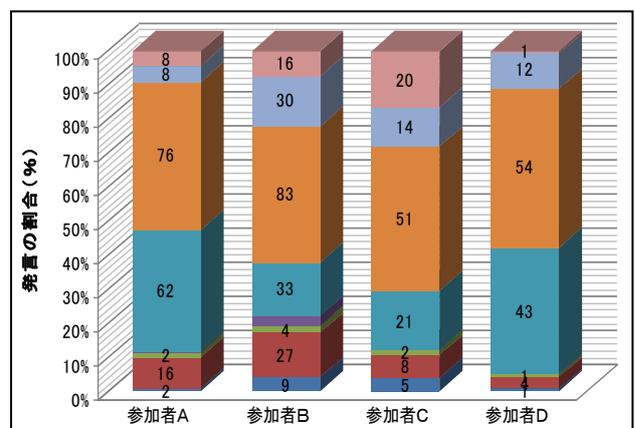


図-13 対面討議(2)参加者の発言の構成 (機能別表示)

(2) 初対面同士の討議における参加者への配慮

初対面同士の討議に参加する人は、緊張感の高まりなどといった要因により顔見知り同士の討議に比べて発言機会が少なくなる場合がある。そこで、初対面同士の討議と顔見知り同士の討議の発言回数を比較することで「初対面同士で討議を行う」ことが参加者の発言行為に与える影響について考察する。

図-14は初対面同士で行った対面討議(1)と顔見知り同士で行った対面討議(2)における発言を参加者別に集計したものである。全発言回数を比較すると、対面討議(2)の620回に対して、対面討議(1)は326回と少なくなった。また表-3より、各幕で出題した議題が結論に至るまでの討議時間は、二つの討議で大きな違いはないことが分かる。このことから、初対面同士で討議を行うことで各参加者は発言に慎重になり、討議中に発言する機会が少なくなったと言える。

発言回数が少なくなることで討議プロセスに与える影響について考察する。表-4に示すように、対面討議(1)の討議中に設定されたサブテーマ総数は40と、対面討議(2)の56に比べて少なくなった。発言回数が減ることで話し合われるサブテーマ数も減り、議題を多角的な視点から検討することができなくなる可能性がある。多角的な視点からの議題を検討することは、質の高い結論を導く上で重要である。そのためにも、初対面同士で討議を行う場合、ファシリテータは各参加者が発言しやすい工夫をすべきである。具体的には、会議開始直後に参加者の緊張感をほぐすために参加者間で自己紹介をするアイスブレイクの手法などが挙げられる。

一方で、話し合うサブテーマが増えることで議論すべき論点が増え、優先順位が曖昧になり、結論から遠ざかってしまう場合がある。また、結論を導く上で不要なサブテーマについて議論が行われる可能性も高くなる。その意味で議論を調整する役を担うファシリテータが参加することは重要である。

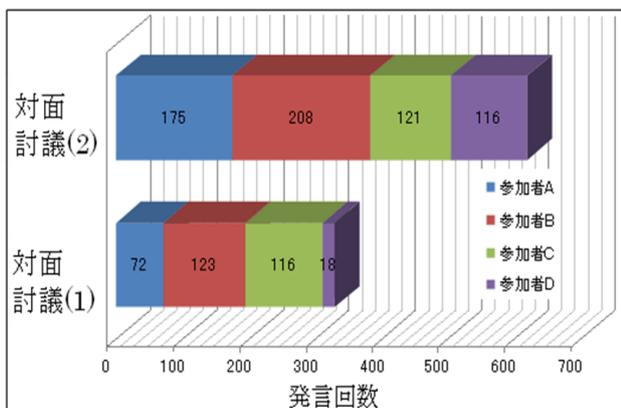


図-14 対面討議(1)と対面討議(2)の発言回数 (参加者別表示)

表-3 対面討議(1)と対面討議(2)の討議時間

	第1幕	第2幕	第3幕	第4幕	第5幕	計
対面討議(1)	11:16	8:00	8:34	9:28	12:40	49:58
対面討議(2)	7:34	8:16	6:02	10:04	16:16	48:12

表-4 対面討議(1)と対面討議(2)のサブテーマ数

	第1幕	第2幕	第3幕	第4幕	第5幕	計
対面討議(1)	10	6	6	9	9	40
対面討議(2)	10	11	8	11	16	56

(3) 参加者の発言への対応

公的討議は参加者が一堂に会して行うのが一般的であるが、慣れていない非対面式の討議を比較対象とすることで慣れている対面式の討議では見られない不要なやり取りを明らかにする。そして、対面式の討議を進める上でどのようなやり取りが暗に前提になっているのかを明らかにし、改めてファシリテータが参加者にすべき配慮について考察する。

図-15は、対面討議(1)と非対面討議全発言を機能別に分類したものである。図-15より、非対面討議は対面討議(1)に比べて「5:無展開」の発言の割合が高いことが分かる。その理由として、非対面討議ではある参加者の意見に対して、モニター越しにいる参加者が「うんうん」、「確かに」といった発言をするというやり取りが頻繁に行われていたことが考えられる。テレビ電話に慣れていない参加者は、意見を述べた際にモニター越しの相手が何も反応しなければ、自分の意見が聞こえているか不安に感じるかもしれない。そこで、モニター越しで意見を聞く参加者は「5:無展開」の発言をすることで、意見を聞いていることを発言者に示していたと言える。

図-16は、非対面討議における第1幕「商店街整備後のイメージはどちらか(二つのイラストを提示)」で行われた会話のグラフの一部である。サブテーマ1-3についての議論に着目する。まず参加者Aが初見を述べ、10秒の沈黙の後に参加者Aが「あれ?どうぞ皆さん」と再び発言した。しかし誰も発言をしないままの状態が続き、18秒後に参加者Cが初見を述べた。参加者Aの「あれ?どうぞ皆さん」という発言は、参加者Aが初見を述べた際誰も反応を示さなかったために不安になり、自分から他の参加者に発言を催促したと捉えることができる。

発言者は意見を聞く側が反応を示さなければ不安になる。対面式の討議においても、ある参加者が意見を述べたが他の参加者が何も反応を示さず沈黙するという展開はよく見られる。意見を述べた参加者はそのような展開を経験することで、他の参加者の考えが読み取れず不安になり、その後発言に消極的になる可能性がある。各参加者が意見を述べやすい状況にするためにも、ファシリテータは参加者が意見を述べた際に何らかの反応を示す

